

53

毒——中日の医家で解釈が異なる病因術語

朱 建 平

中国中医科学院中国医史文献研究所

毒の本義は有害な物を指し、そこから薬の意味が派生したので、時に薬と毒は互訓された。つまり医学用語としての毒は、中国医学が発展していく歴史過程で異なった意味をもっていた。その異なった語義の中で、毒や毒を含む用語は、疾病・証候・症状・病因・薬物・治法の内容までも指している。病因概念では、毒は全てを指すこともあれば、ただ種類のみを指すこともある。本報告では主に中日の伝統医家における「毒」という病因術語の中味と広がり、およびその定義の変化を検討し、日中医家の「毒」解釈の相違と関連を比較したい。このため中国古医籍中の関連部分と、日本の吉益東洞「万病一毒」説と吉益南涯の「気血水毒」説を主に検討する。

中国医学では病因術語としての「毒」に二つの意味がある。一つ目はあらゆる病因を指す。例えば清・尤怡の『金匱要略心典』（1729）には、「毒は邪気蘊結して解せざるの謂いなり」とある。清・徐延祚『医医瑣言』（1897）には、「百病は一毒の為なり、毒去りて体佳し」とある。二つ目は一つの病因を指す。例えば『雑病源流犀燭』では伏暑を「若し熱毒の気、既已に之を受け、或いは些小の風寒の固まる所と為らば、此の毒、遂に漸漸として内に入り、三焦腸胃の間に伏し、或いは秋、或いは冬、久久として発す。此れ暑毒、人身の内に伏せる者なり」と解説している。

一方、日本の漢方医学で「毒」は、病因術語として広く発病因子を指している。例えば吉益東洞の『古書医言』に、「邪は毒の名なり」とある。ここでの「邪」は正気と相対するもので、発病因子の総称とされている。

「毒」について日本の漢方医家は、無形の一毒から有形の三毒までの変化を唱えた。これは吉益東洞・吉益南涯親子の医論に、まとまって反映されている。吉益東洞（1702-1773）が提起した「万病一毒」論は門人の鶴田元逸が整理した『医断』（1759）に見え、「留滞すれば則ち毒と為り、百病焉に繋かる」とある。この論は『呂氏春秋』の精鬱論に起源するという。『続医断』一毒には、「万病唯一毒の説、之れ『呂氏春秋』精鬱の論に本づき、焉を為す所有り。……一は万に対するの称、諸病は皆な唯だ毒のみの謂いにして、其の歸する所一なるを示すなり。各の病に各の毒有るに非ざるなり。病は必ず性を害し、故に之を毒と謂う」と解説されている。

吉益南涯（1750-1813）はさらに論を進め、毒を無形、物（気・血・水）を有形とし、無形の毒は有形の物を借りて発病し、気毒・血毒・水毒に分かれると考えた。『続医断』一毒には、「毒は無形の者、物は有形なり。毒は必ず有形に乗ず。既に有形に乗ずれば、然る後、其の証見（あらわ）る。乗ずる所は一、而して変ずる所は三物なり。故に一毒と曰い、三物と曰う。病せしむるは毒、而して病む所は即ち気血水なり」と述べている。『続医断』の物では「物は何ぞや。気血水、是れなり。体中の物、斯の三有るのみ。其の状知るべし、其の形見るべし」と述べている。さらに彼は太極説をも応用した。『続医断』の一毒では、「一毒は猶お易に太極有るがごとし。太極は事に非ざるなり、法に非ざるなり。然らば陰陽の義、事物の理、鹹な此に由らずして出ざる莫し。太極は両儀を生じ、既に陰陽有らば、陰陽の外、更に太極有るに非ざるなり。太極は物に従いて分かれ、故に一は二を生じ、二は三を生じ、然る後に妙用言うべし。気血有りて水有らば、一毒必ず之に乗ず。故に三物は、三極の道なり」と解釈したのである。

このように吉益氏の毒に関する理論は、中国伝統文化である『呂氏春秋』・太極等に基づく。しかしながら、中国医学に元からあった理論とは無関係といえよう。